世界の難民情報を伝える

UNHCR NEWS

United Nations High Commissioner for Refugees

Number 2

MAR 1997

Contents

Special Report

インドシナ難民問題を振り返って
ベトナム難民19年目の再会
インドシナ難民年表

世界各地の難民状況

Campaign Report/Information

世界中に広がったピースパック・プロジェクト
日本傷軍人会が、ルワンダ難民女性を支援
ジャスコ・イオングループ　難民救済キャンペーン
関西キャンペーン　ご協力ありがとうございました
キャンプ・サダコ'97

UNHCR
国連難民高等弁務官駐日事務所

SPECIAL REPORT

インドシナ難民問題を振り返って

ベトナム難民 19年目の再会

1975年、ベトナム戦争が終わると、近隣諸国をめざして小船で海上に逃れるボートピープルの流出が始まった。UNHCR駐日事務所の活動も、彼らに対する援助をきっかけに始まった。しかし推定200万人にのぼったインドシナ難民への援助も昨年ようやく終了した。いま、ひとつの難民ストーリーを振り返ってみたい。

「私たちが今、ここに集うことができた幸せを感謝いたします。シスターの皆さん、本当にありがとうございました。」

昨年7月8日、東京都調布市にあるノートルダム修道院でベトナム語によるミサが19年ぶりに行なわれた。この日、修道院に集まったのは米国に定住した元ベトナム難民とその家族たち17人。彼らはボートでベトナムを脱出、難民として日本のタンカーに救出された後、米国に受け入れられるまでの6か月間をノートルダム修道院で過ごしていた。ミサには、当時ここで難民の世話をしていたシスターたちやタンカーの船長たちも参加し、再会を喜びあっていた。

グループが祖国を脱出したのは、20年前の1977年4月10日。真夜中に、全長約13メートルの小船で南シナ海に乗り出した。乗っていたのはグエン・ティンさん（当時47歳）をリーダーとする77人。中には妊娠中の女性4人と33人の子どもたちもいた。

目的地はフィリピン。航海は、学校の教材で使っていた地図とコンパスだけが頼りだった。予想よりも多くの人たちが集まったため、船に積みこめた水や食料はわずか数日分。みんな「一日でも早く安全な所に到着したい」と祈る気持ちだった。

日中は沿岸警備隊の目を逃れるため、船底に伏せていた。出発してから2日目、遠くに多くの船影を見かけるよ

「この修道院は心のふるさと」。再会を喜びあうシスターと元ベトナム難民たち。（写真 ノートルダム修道院）

うになり、公海上に出たと知った。最初に救出されたのは、その日の夜。近くを航行した白い船にランプで合図したところ、船は速度を落として接近してきた。ティンさんたちは喜びのあまり、船籍も確かめないまま、船から下ろされた縄ばしごに飛びついた。

船員たちはとても親切だった。しかし、その船がソ連籍だと知った時、ティンさんたちの喜びは恐怖に変わった。ソ連はベトナムの友好国であり、自分たちをベトナム当局に引き渡す恐れがあった。女性の中には絶望のあまり、泣き出す者もいた。ティンさんは必死になって「もう一度、私たちを元の船に返してください」と船員たちに頼みこんだ。幸い、船長はティンさんたちの離船を許してくれた。小船に戻るのは不安だったが、他に途はなかった。

高松丸に救われて

漂流してから4日目。マラッカ海峡を抜けて北上するタンカー「高松丸」（日本郵船・共栄タンカー所属）と遭遇したのは4月14日の朝だった。ティンさんたちは「SOS」と書いた白布を掲げて、懸命に手をふった。「高松丸」の越亨船長（当時51歳）はとっさに「ベトナム難民かもしれない」と判断し、東京の本社に連絡をとった。すぐに「救出せよ」という返事がきた。

越船長は「社長は義に厚い人間でね。そういうことなら、助けにゃいかん。後のことはまかせておけ、と言ったんです。まあ、ベトナム難民のことは知っていましたが、まさか自分たちが出会うとは思いませんでした」という。

救出はしたものの、乗組員が31名という「高松丸」に77名の難民が乗り込み、船内はパニック状態となった。函館に入港するまでの9日間はハプニングの連続。特に健康には神経を使った。通信士兼衛生管理者だった福田千之助さん（当時41歳）は

このような小船でおびただしい数の人々がベトナムから脱出した。（1982年 東シナ海で）
UNHCR/B.Boyer

自分の乗船記録にこう記した。「衛生管理者の資格しかない自分が、小児科や産婦人科の看護をさせてもらったのだから、一生に残る戦慄すべき怪挙？であった」。とにかく77人もの人たちの健康管理に責任を負うことになり、病人でも出ると福田さんの睡眠時間は3～4時間になってしまった。

若い妊婦が早産しかけた時は、本当に慌てた。さらしをおなかに巻いて、なんとかしのいだが、冷汗ものだった。一番大変だったのは、7歳の男の子が水ボウソウで発熱した時。「ベトナム人は、子どもの頃によくかかる病気だから大丈夫だという。僕たちもそう思ったんですよ。だけど何しろ天然痘の症状にもよく似ていたので、万が一、伝染病だったら上陸できなくなっちゃうんですよ」。福田さんは無線で横浜船員保険病院から指示を仰ぎ、抗生剤を投与。看護のかいあって、検疫官から「伝染病ではない」との診断をもらった。「その場に倒れこみそうなくらい、安堵しましたよ」と述懐する。

この航海の間に、栄養失調に近い状態だったティンさんたちも健康を取り戻していった。「高松丸」との出会いは、本当に幸運だった。救出された2日後から、南シナ海は大荒れに荒れたのだ。「もしそのまま漂流していたら、私たちの船は嵐で間違いなく沈没していたでしょう」とティンさんはため息をもらした。

シスター・パーマーとの出会い

4月22日早朝、「高松丸」は無事、函館港に入港した。ここで難民たちは4つのグループに分かれそれぞれ調布、鎌倉、藤沢、中野の修道院に向かった。そのうちノートルダム修道院に収容されたのは、ティンさんを含む31名。みんな米国への定住を希望していた。

修道院ではカナダ人のシスター・パーマー（当時62歳）が受け入れの責任者として、難民たちの世話にあたった。パーマーさんは日常のスケジュールの中に、英語や洋裁の技術指導の時間を盛りこんだ。米国に行くまでの期間をムダに過ごさないよう、いろいろ気を配っていた。難民たちの将来を考えると、時には厳しい態度をとることもあった。一般の人からテレビの寄贈を申し出られた時も、「今はテレビを楽しむより、勉強が大切」と寄付を受け付けなかった。本当に難民たちを思うパーマーさんの姿勢は、ティンさんたちに大きな感銘を与えた。

1977年10月26日、出産を間近にひかえた一家族を残して、難民たちは米国に旅立った。しかし、その後もパーマーさんは彼らと文通を続け、休暇でカナダに帰国するたびに、米国を訪れてはティンさんたちの生活の様子に気を配ってきた。彼らは米国中に住んでいるため17回も飛行機を乗りかえることもあった。

SPECIAL
REPORT

インドシナ難民問題を振り返って

**ベトナム難民
19年目の再会**

「ふるさと」日本で再会

今回、日本にやって来たのは調布に滞在していた7名とその配偶者や子どもたちだ。米国での生活も落ち着き、ようやく当時を振り返る余裕が出てきたのだ。ミサには、元「高松丸」船長の越さんや福田さん、それに通訳として活躍したダン・タン・ファットさんも駆けつけた。

「ここに来たら、自分の家に帰ってきたような気がしました」というのは、当時20歳の若者だったトリン・ユエンさん。今は4人の子どもを持つ父親だ。「長い間、みんなにありがとう、とお礼が言いたかった。今その願いがかなってうれしい。」

ミサの後に催された昼食会では、ニヤ・グェンさんが英語であいさつをした。「ここは私たちにとって本当の『ふるさと』だったのです。やすらぎと愛に満ちた地上の天国でもありました」とシスターたちへの感謝の言葉を述べていた。

そのスピーチに対し、シスター・パーマーは「私たちはお世話をしたけれども、あなた方から学んだことのほうがはるかに多いんですよ」と応えていた。

助けた者、助けられた者。お互いの心が優しく通いあった一日だった。

インドシナ難民年表

1975 ベトナム戦争終結。
ラオスで政変。
難民の流出始まる。
日本に初めてボートピープルが上陸。
国連総会、「インドシナ難民」に対する人道援助をUNHCRに命じる決議を採択。
1976 ベトナム南北統一。
1978 ベトナムから、約26万3000人の難民が中国に定住。
閣議了解で日本でのベトナム難民の定住が認められる。
一家族が初めて日本に定住。
1979 カンボジアで政変。
日本政府、海外の難民キャンプに滞在するインドシナ難民の定住認める。
ベトナムからの「合法出国計画」(ODP)開始。
タイなどの周辺国への流入数がピークに達する。
第1回「インドシナ難民国際会議」開催。
UNHCR、日本に駐在事務所を設置。
アジア福祉教育財団に難民事本部が発足。政府から委託を受けて定住援護事業を開始。
1980 難民事業本部、海外のキャンプへ調査団の派遣を開始。
ラオス難民の本国帰還始まる。
1981 日本政府、「難民の地位に関する条約」・同議定書に加入、「出入国管理令」が「出入国管理及び難民認定法」に改正(82年1月発効)。
1982 タイ政府、「海賊抑止計画」を開始。
1985 閣議了解でインドシナ難民の定住枠が1万人に拡大。
1989 **第2回「インドシナ難民国際会議」でスクリーニング制度の導入などを合意。**
閣議了解でベトナム人の上陸審査に同制度の導入を決定。
1991 カンボジア和平協定、パリで調印。これにより約37万人のカンボジア難民の帰還が決定。
1992 カンボジア難民の「本国自主帰還」始まる(93年3月終了)。
1996 **UNHCR、インドシナ難民に対する援助活動の終了を宣言。**

長く続いた流出と難民の質的変化

本来、「難民」かどうかは、自国で迫害の恐れがあるかを個別に審査して決められる。しかし、ベトナム、ラオス、カンボジア三国のインドシナ難民については、数が大量だったことと、流出の背景に長年の戦乱による荒廃と急激な社会体制の変化があったため、一括して「難民」に準じる人々とみなされた。

数多くの流入があった東南アジア諸国は、難民の第三国定住を条件に一時庇護を与えた。75年以来、総計約144万人が東南アジア諸国に一時滞在し、約130万人がアメリカ、フランス、カナダなどの欧米諸国に出国した。インドシナ難民問題は、第三国定住を中心に解決された珍しい例だ。

しかし、ボートピープルの脱出は、一時は減少したが止まらなかった。87年後半にふたたび急増。寛容に定住を許してきた先進諸国も限界に達し、一方、行き先のない難民たちが、東南アジア諸国のキャンプにひしめいていた。また、ボートピープルの質的な変化があり、迫害の恐れよりも経済的な理由で祖国を離れた人々が大半を占めてきた。このため国際社会は1989年、第2回「インドシナ難民国際会議」を開催し、「包括的行動計画」(CPA)を採択した。

CPAと援助活動の終了

CPAの内容は、1)「合法出国計画」の奨励、2)スクリーニング制度の導入、3)本国自主帰還の奨励を柱とした。

スクリーニング制度を日本を例にとると、まず、「仮上陸」を許可した後、「一時庇護上陸」のための審査を行なう。ここで、本国で迫害の恐れがある「難民」か、そうでないかを審査する。「難民」と認められれば、これまで同様、「一時庇護上陸」を許可され、「日本定住」か「第三国定住」の機会が与えられる。「上陸」が許可されない者には、「本国自主帰還」を促すというものだ。89年に日本にきた多くのボートピープルもこの制度によって「難民」とは見なされず、大半が本国に帰還した。

本国帰還奨励の背景には、政変後十数年を経た出身国の人権状況の改善がある。UNHCRは、帰還の資金的援助や帰還先でのモニター活動を実施。さらに帰還民の多い地域では、コミュニティ全体を潤す小規模な即効プロジェクトによって、再定着を促進してきた。

1991年、紛争の続いたカンボジアも、パリの包括和平協定に調印。93年の選挙に向けて、難民約37万人がUNHCRの援助で、13年ぶりにタイからバスや列車で帰郷した。また、ラオス難民の本国帰還も94年から飛躍的に進んだ。

こうして95年、「インドシナ難民国際会議」執行委員会の席上、UNHCRによるインドシナ難民に対する一時滞在国での援助活動を、香港を除き96年6月で終了すると決定された。本国での帰還民モニターと再定着支援は続けられる。

多くの生命と国際社会の重荷という犠牲をはらったインドシナ難民問題もこうして幕を閉じた。日本に定住した約1万人のインドシナ難民は、地域社会にとけ込もうと努力を続けている。

世界各地の難民状況

詳報はインターネットのホームページでご覧ください
http://www.unhcr.or.jp

続報：アフリカ中部 緒方高等弁務官、6か国を訪問

ザイール東部で昨年10月半ばに始まった地域紛争は、今年に入っても続いている。同地域にいた難民の大半はすでに自国に帰還したが、一部はザイール奥地へ逃げ、所在がつかめない難民も多い。UNHCRなど国際機関による人道援助活動も、混乱の中で2月始めに援助職員が殺害されたり、事務所が略奪されるなど、深刻な影響を受けている。1月10日には、タンザニアから強制送還されたブルンジ難民122人が殺害された。

このような中、緒方貞子高等弁務官は、アフリカ大湖地域の援助活動について協議するため、2月7日から10日間にわたって、ザイール、ルワンダ、ブルンジ、ケニア、タンザニア、ウガンダの6か国を訪問した。同地域への訪問は、94年7月のルワンダの大量虐殺事件から5回目。各国で大統領や首相、担当大臣らと話し合い、キャンプを視察した。

緒方弁務官は、ザイール東部の難民キャンプへの戦闘波及を懸念し、難民約15万人をかかえるティンギ・ティンギ・キャンプを攻撃しないよう反政府武装勢力によびかけた。同キャンプは治安悪化のため一時、援助が停止され、食糧、水、医薬品などが著しく不足し、毎日約25人が栄養失調や病気で死亡していた。

ジュネーブに戻った緒方弁務官は、ルワンダ難民の祖国帰還のための「回廊」設置にザイール政府が原則として同意したと発表した。現地の反政府武装勢力の指導者たちも、ティンギ・ティンギの非武装化に努力すると、UNHCRに約束した。緒方弁務官は「このような約束はいつでも歓迎する。今後に期待したい」と述べた。回廊設置にあたって多国籍軍の動員予定はない。

(97年2月17日現在)

UNHCR、タジキスタンにおける職員誘拐を非難

UNHCRは2月6日、タジキスタンにおいてUNHCR職員4名ほか12名(国連監視団員5名、国際赤十字職員2名、ジャーナリスト5名)が誘拐された事件に関する声明を発表した。声明で緒方弁務官は、「この事件は、国際援助関係者の安全が著しく損なわれた事実を示す」と述べ、強く非難するとともに、人質の早期釈放にむけての最大限の努力をタジキスタン政府に要請した。

誘拐されたUNHCR職員は、ナイジェリア出身の国際職員1名、地元ガードマン1名、ドライバー2名で、首都ドゥシャンベ東方80キロのオビガルンにつれ去られた。人質は、2月17日までに解放されたが、「生きて帰れないと思った」と語った。93年から紛争が続くタジキスタンでUNHCR関係者の誘拐は初めて。

ソマリア難民の祖国帰還が開始

2月18日、エチオピアからソマリア難民35家族約200人が、UNHCRの自主帰還計画にもとづいてソマリア北西部に帰還した。200人は9か月分の食糧と現金200ブル(約30ドル)を支給され、バス6台に乗り込んで故郷に向かった。

ソマリアでは1991年以降、内戦と干ばつを逃れて100万人近くが近隣諸国へ流出した。大半はすでに祖国にもどったが、現在でもエチオピア東部の9つのキャンプに約29万人、ケニアに12万6000人、ジブチに2万人、イエメンに1万人のソマリア難民がいる。

UNHCRは93年以降、即効プロジェクトを実施して帰還準備を重ねてきた。今回の試験的な計画では初めに1000人、5月までに約1万人が帰還する予定。

UNHCR、イラク北部地域での援助停止を発表

UNHCRは96年12月21日、トルコ系クルド難民約1万4000人を収容するイラク北部のアトルーシ・キャンプに対する援助を1か月以内に停止すると発表した。「キャンプの人道的かつ中立的な性格が著しく歪められ、もはやUNHCRが援助を続けられなくなった」という理由からだ。キャンプ内の活動家によって難民がトルコへの帰還を自由に選択できなくなっている。

緒方高等弁務官は、「大部分が女性、子供、老人である難民を、私たちが見捨てるわけではない。トルコへの強制的な帰還もない。イラク北部にとどまる人々には引き続き、個々のベースで援助を続けていく。しかし、人々の基本的自由がうばわれ、極度に政治化した難民キャンプをこれ以上援助はできない」と述べた。

ザイールのキャンプからルワンダに帰還する難民たち。1996年11月。
UNHCR/R.LeMoyne

Campaign Report / Information

世界中に広がったピースパック（平和の小包み）プロジェクト

1998年9月の国連平和の日を期して、UNHCRと世界ガールガイド・ガールスカウト連盟が共同で、世界平和の実現に向けて世界の難民を支援する「ピースパック・プロジェクト」をはじめた。

難民の子どもたちを元気づけようと、年齢や性別にあったノートや石けん、ペン、長袖Tシャツなど15品に、心を込めたメッセージを添えて一人分ずつ包むというものだ。このピースパック、「平和の小包み」は、これまでに25万個が40か国に送られてきた。参加したガイドとスカウトの数は実に170万人にのぼる。

また、（社）ガールスカウト日本連盟の会員9万人が3年間で、アフガン難民に送ったピースパックは、2万5000人の子どもたちに届けられた。

今年も1月29日、日本通運（株）で、贈呈式が行なわれた。会員たちの心のこもったピースパック約1万5000個は、3月5日にパキスタンのカラチに到着。アフガン難民の子どもたちに手渡される。今回の輸送には、日本通運（株）や（社）霞会館からの支援、外務省のNGO事業補助金がよせられた。

ガールスカウト日本連盟はさらに現地に調査団を派遣し、アフガン難民の実情を調べ、小包の内容をよりニーズに合うよう努めている。1995年に引き続き、96年3月18〜30日に第二次調査団が派遣され、6人がパキスタンを訪問した。目的は、ピースパックの一部をペシャワールで配ることと、ガールガイドパキスタン連盟による識字教育活動に日本のガールスカウトがどう協力できるかなどを調べることだった。

どこの学校でも大歓迎され、子どもたちは受け取ったピースパックを「大事に胸にかかえ、走って教室に戻ると早速、友だちと中身を見せ合っていた」という。

ガールスカウト日本連盟の会員からピースパックを受け取るアフガン難民の少女。1996年3月。

ガールスカウトでは、このプロジェクトを単なる援助活動にとどめず、世界と自分のつながりについて考える国際理解教育と位置づけている。ピースパックを渡している映像を見て、19団レンジャーの長尾さんは、感想をこう述べている。「私と同じ年くらいの子どもたちがピースパックを受け取っている笑顔がとても印象に残りました。私が何か簡単なことをすると相手が笑顔を返してくれる。そして私もハッピーになれるという、大切なことに気付きました。」

日本傷痍軍人会が、ルワンダ難民の女性を支援

昨年暮れ、日本傷痍軍人会と日本傷痍軍人妻の会からUNHCRにルワンダ難民援助の募金がよせられた。これによって「ルワンダ女性イニシアチブ」というルワンダ難民女性の自立支援プロジェクトが実施できるようになり、緒方貞子高等弁務官も心からの感謝の意を表した。

このプロジェクトは、「ボスニア女性イニシアチブ」の成功例にならって計画された。ボスニアでは、特に帰還民や国内避難民の女性の参加をうながして、復興と国内の民主化に効果をあげている。

ルワンダでは、昨年末に推定130万人の難民が帰還したが、人口の7割は女性、しかもその6割近くが家長で母子家庭だとされている。「ルワンダ女性イニシアチブ」は、これら紛争の被害者で、社会的にも弱者である難民女性の自立を支援するため、法律、住宅、地域サービス、保健、教育・職業訓練、収入確保などの援助を含んだ総合的な計画である。

傷痍軍人会では、「何よりも戦争が終結されることを願いつつ」、各県の会に募金箱を設置して引き続きUNHCRへの支援を行なっている。

募金211万円余をUNHCR駐日代表に手渡す辻三郎・中央対策委員長（右）

ジャスコ・イオングループ ルワンダ難民救済キャンペーン

ジャスコとイオングループ各社では、97年1月1日〜31日、ルワンダ難民の子どもたちへの救済キャンペーンを行なった。これは、同グループの「環境・社会貢献活動」の一環として、「世界の子どもたちに笑顔と幸せを」をテーマに、難民の子どもたちを援助したいとの思いで実施されたもの。

ジャスコ・イオングループの全国の事業所、店頭でUNHCRのパネル展示や募金活動を実施、ルワンダの子どもたちへの支援を呼びかけ、従業員自身も募金した。また、ジャスコ四国事業本部と兵庫中国事業本部の9店舗では、「元旦難民救済バザー」を開催。専門店やイオングループ、一般企業、一般のお客様からもバザー品提供の協力を受け、従業員も年末年始を返上して協力したバザーは多大な反響を呼んだ。募金額は1か月間で、総額4141万2172円にのぼった。関係者と募金された皆様、ご協力、ありがとうございました。

元日のバザーだけで327万円の収益金が集まった。

関西キャンペーン ご協力ありがとうございました。

関西地域の経済団体や労働組合、国際交流団体8団体が中心となって昨年10月15日に開始された「国連難民キャンペーン」が1月15日でいったん終了しました。現在集計中ですが、2月22日までに180をこえる企業、労働組合、団体、個人などから合計966万8323円が寄せられました。多数の方々から暖かいご支援をいただき、また、キャンペーン終了後も難民援助に協力を申し出てくださる団体もあり、高等弁務官をはじめUNHCR職員一同、心から感謝しています。

キャンプ・サダコ'97

緒方貞子高等弁務官の名にちなんだ「キャンプ・サダコ」は、日本のUNHCR事務所が1993年にスタートさせた青年向けの研修プログラム。その後、UNHCR全体のプログラムとなり、これまでに25か国から180人の若者が7か国でUNHCRの活動に携わってきた(うち日本からは38人)。

この目的は、難民援助の現場を実際に体験して難民問題への理解を深め、その体験をもとに難民問題とUNHCRの活動についての理解、支援を広めるための人材を育てること。費用は主に自己負担で、約1か月間キャンプで難民援助を体験する。

活動の内容は、各参加者の技能や経験によって決められる。これまでは、食糧配給などの援助についての調査研究や、医療活動、難民対象の特別活動の企画などを行なった。帰国後は各自、投稿や講演、広報活動への参加などを通じて、積極的に難民支援のネットワークを広げている。

今年も、大学・大学院生や社会人など、広く一般から参加者を募集した。

日本からの参加者を募集したプログラム

＊ネパール：7〜8月(6週間)に2名
＊ケニア：7〜8月(6週間)に2名
＊ケニア：9〜10月(6週間)に2名
＊ギニア：9月(4週間)に1名

読む資料・見る資料

さしあげます

季刊誌

●「難民 Refugees」―― 難民問題の現状と保護・援助のあり方をめぐってさまざまな問題点を取り上げる評論と情報誌。
特集には難民保護と国際社会の対応、人道援助活動をめぐる将来の展望など、各層の視点を紹介します。

パンフレット

1 難民問題のあらまし―― 難民問題の現状、問題解決のための対処とUNHCRの活動

2 難民女性とは―― 難民の８割をしめるのは女性と子どもです。暴力の犠牲となりやすい女性たちの実態を各地の例から取り上げます。

「難民の子どもたち」―― どうして難民になったのか、逃げる途中でどのような経験をしたのか、キャンプではどんな生活を送っているか、そして将来の夢など、子どもたちの声が聞こえてきます。世界の難民のうち半分を含めるのは子どもたちです。
平和な日本で暮らす私たちにできることはなんでしょう。小学生から高校生向けのカラー冊子（20頁）は子どもたちの切実な体験を伝えます。

1. ポスター 2種類

「あなたの子はこんな絵を描きますか」―― 世界の難民の子どもが描いた絵画から、パキスタンにいるアフガン難民（12歳）とケニアにいるスーダン難民（17歳）の作品2点を選んでポスターにしました。彼らの心に刻み込まれている体験を伝えます。
サイズA2（42×59cm）
難民地図、UNHCRや難民などについての説明と写真で構成したセット。10枚一組。サイズA2（42×59cm）

UNHCR早わかり

●UNHCR早わかり（最新版1996年12月発行）
●UNHCRの概要

ニュースレター

●UNHCR News（現在の難民の状況とUNHCRの援助活動）

お貸しします

展示用パネル

文字、写真パネル、世界難民地図を合わせ20枚が一組です。（68×47cm）
※貸し出し希望期間、使用目的、主催者をお知らせください。（ご要望が多いため、2ヶ月前にはお申し込み下さい。）

ビデオテープ

1（日本語吹替え版・字幕版）
●ほんのちょっと変えてみよう（14分）
2（日本語吹替え版）
●世界の難民はどこに'95（19分）
●難民女性

お知らせ

UNHCR駐日事務所はホームページを開設しています。ぜひご活用ください。
http://www.unhcr.or.jp

お問い合わせ先

UNHCR駐日事務所　広報室
〒107 東京都港区赤坂 8-4-14
TEL03-3475-4882
FAX03-3475-4884

資料や募金箱は、基本的に無料です。ただし送料と、資料枚数の多い場合はコピー代がかかります。広報室宛に、ご質問も含めて官製はがきでお申しこみください。できる限り「着払い」（宅急便または郵便小包）をお願いいたしますが、ご無理な場合、送料分の切手を、資料受け取り後、同封の受領証と共に広報室宛てにご返送ください。

UNHCRニュース NO.2
1997年3月
●発行
UNHCR駐日事務所　広報室
●郵便振替
口座番号：00130-4-59734
加入者名：UNHCR

表紙写真　上左：UNHCR/R.Burrows　上右：UNHCR/W.Stone
下左：UNHCR/A.Hollmann　下右：UNHCR/A.Hollmann